様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ００７６８

研究課題名（和文）後期高齢者の「低栄養」を予防するための「食と心理的支援」の研究

研究課題名（英文）A study of "dietary support and psychological support" to prevent " undernutrition" in the elderly

研究代表者
加藤　佐千子（KATO, Sachiko）

京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授

研究者番号：８０２３３７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は高齢者の低栄養予防を食支援と心理的支援の両輪で行うことが重要であることを明らかにするために実施した。高齢者への調査では、低栄養傾向や摂取不足を認識していない高齢者の存在が明らかとなった。また、高齢者の食物活動に対する考え方を明らかにした。配食サービス関係者への調査では、食事を配達するボランティアはコミュニケーション力が高く、利用者の栄養支援や心理的支援の必要性を見極める資質を持っていることが求められており、その資質を備えた人材養成が急務であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では低栄養予防には、食品摂取の工夫や調理技術の習得など、栄養摂取に重点を置く食事支援だけでは不十分であり、同時に心理的支援も行う必要があることを証明することができた。この結果は支援者側にとっては高齢者個人を深く理解することに繋がり、高齢者においては健康的な食物選択へと関心を向けてもらうことに繋がると考えられた。高齢者の食行動を改善するためには、高齢者の気持ちを汲み取り、食物摂取と心理面の両面から低栄養予防施策を計画する必要があり、本研究結果はその計画を推進する裏付けとなり、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This study was conducted to clarify the importance of preventing malnutrition in the elderly through both diet and psychological support.A survey of the elderly revealed the existence of elderly people who were not aware of malnutrition and inadequate intake, and also clarified their views on eating habits.According to a survey of food service providers, volunteers who provide meals were required to be highly communicative and able to determine the needs of users for nutritional and psychological support. It is necessary to develop human resources with such qualities.

研究分野：生活科学

キーワード：後期高齢者　独居　低栄養　フレイル　心理的支援　食物活動　配食

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢者の低栄養は生活機能の維持と関連することから、地域で生活する高齢者においてはなるべく避けるべきである。しかし、加齢により年金生活による経済的不安や食物獲得がままならない状況も発生し、低栄養へ向かうリスクは大きいと考えられる。また、高齢女性においては、夫との死別によって、食事づくりの意味や役割感を喪失すること、孤独感を感じること、食欲をなくすことなどが明らかとなっている[1)]。加えて、夫不在の時には、準備する食事の内容を簡素化する女性高齢者も見受けられる[2)]。

女性の場合、高齢層ほど抑うつ状態の割合は増加する。抑うつ状態であるほど孤食を招きやすく、孤食の状態は、食事内容だけなく、人とかかわる機会、食べる楽しみの減少を招く。さらには、自身が不適切な食事内容であることへの心配を抱きつつも、その現状に妥協しなければならないというように、あきらめを感じている者[3)]や、口腔状態の悪化に気づかず食欲が低下し栄養摂取が妨げられている者も存在する。食欲が低下した人では日常生活満足度も低下する[4)]。このように心理的問題は食物摂取や身体状況や生活の質を低下させる。

高齢者が低栄養に至る要因は、①社会的要因（貧困、独居、介護不足、孤独感、栄養に関する知識不足）、②疾病要因、③精神的・心理的要因（認知機能障害、うつ、窒息の恐怖）、④加齢の関与（嗅覚、味覚障害、中枢神経系の関与による食欲低下）[5)]などである。現状では低栄養に至る要因は明らかとなっており、低栄養予防に向けて栄養面の支援の必要性は言うまでもない。しかし、高齢者本人が自身の食生活や食物活動をどのように捉えているのかについては整理されておらず、食に関する心理的支援の内容や方策については明らかになっていない。どのように心理的な部分に働きかけることが低栄養防止に効果的なのかを明らかにする必要がある。

２．研究の目的

これまでの栄養調査では日々の食事状況を明らかにし、その結果をもとに具体的に「何をどのくらい摂取すればよいか」について高齢者を支援することができた。しかし、上記の研究背景より、高齢者は食生活や食物活動と関連する様々な心理的問題を抱えていることが明らかである。高齢者側には摂取できない理由が存在すると考えられる。したがって、食事や栄養指導に重点を置く食生活支援だけでは不十分である。食生活上の問題が生じた現状を高齢者自身はどのように捉えているのか、なぜその食品を食べるのか、あるいは食べようとしないのかなど、付随する心理的な問題もあわせて聴き取り、解決していく必要がある。人々の食行動には、必ずと言っていいほど理由があり、その理由を理解し解決しなければ、栄養指導や食生活介入は目的通りにはいかないと考えられ、食生活支援と同時に心理的支援（情緒的サポート）も行う必要がある。

そこで本研究は、高齢者の低栄養を防止する食生活確立に向けて、高齢女性の食物摂取状況および食物活動に付随する心理的状況や心理的変化のプロセスを明らかにすることと、内外の配食に携わる施設における食と心理的支援の状況を把握することを目的とした。

研究１：80 歳以上独居女性高齢者の食生活状況と食物活動についての認知内容を明らかにする。

研究２：内外の食事（配食）サービスを行う施設の食と心理支援の状況と課題を把握する。

3．研究の方法

(1)研究１の方法（①食生活状況と食物活動についての心理状況を明らかにする研究）

機縁法を用いて、あるいは市内の高齢者団体に依頼し、地域に居住する自立した独居の高齢女性（80 歳以上）13 名の協力を得た。調査は 2016 年 8 月～12 月に実施した。データの収集は留め置き法による自記式質問紙調査、身体測定、半構造化面接などの方法を用いた。質問紙調査の内容は、食習慣（簡易型自記式食事歴質問票；BDHQL を使用）、身体状況（身長は自己申告、体重、下腿周、握力は測定）、日常生活状況などである。日常生活状況は、介護予防／基本チェックリストを使用して IADL や抑うつ状態を、ライフコーダーを用いて歩数、運動量、活動時間、総消費量、エクササイズ量などを把握した。

食習慣では、得られたデータをもとに推定エネルギー量、摂取エネルギー量、タンパク質・脂質・炭水化物の総摂取量に占める割合（密度法）などを算出した。基礎分析、個人結果分析等は、（株）ジェンダーメディカルリサーチに委託した。

半構造化面接では、面接場所を対象者の自宅または希望場所を適宜設定した。質問はインタビューガイドをもとに、過去から現在における食物活動に対する認知を自由に語ってもらい、IC レコーダーに録音した。逐語録の分析は、これまでの食行動やその変化についての語りを抽出し整理、カテゴリー化して解釈を行った。

倫理的配慮として、協力者へ調査の趣旨および倫理的配慮の説明を文書と口頭で行い、同意を得た。研究実施に当たり、京都ノートルダム女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号 16-013、承認日 2016 年 7 月 20 日）

(2)研究２の方法（②内外の食事（配食）サービスを行う施設が抱えている食と心理的支援の状況と課題を明らかにする研究）

協力施設は、Open Hand（所在地：San Francisco）、Kokoro assist living for senior（所在地：San Francisco）、On Lok（所在地：San Francisco）、老人給食協力会ふきのとう（所在地：東京都）の 4 施設である。Open Hand、Kokoro、On Lok は非営利団体、老人給食協力会ふきのとうは任意団体である。

ヒアリングの協力者は、いずれも配食や食事サービスに関わる職員である。Open Hand および Kokoro では各 1 名、On Lok は 2 名、老人給食協力会ふきのとうは 2 名（男性；勤務歴 20 年、女性；勤務歴 8 年）の協力を得た。面接は筆者らがインタビューガイドをもとに半構造化面接を行い、協力者に自由に語ってもらった（複数の協力者がいる施設では 2 名同席のもと一緒に自由に語ってもらう形式で行った）。ヒアリングの時間は施設内見学も含めて 30 分～40 分であった。実施場所は、当該施設の協力を得て施設内の一室で行い、ヒアリングの内容は、協力者の承諾を得て IC レコーダーに録音した。訪問時期は、2017 年 6～7 月である。なお、サンフランシスコにおける調査では性別や年齢、勤務歴を尋ねることは差別になるので尋ねていない。

当該施設の歴史や特徴についてはヒアリングや施設から提供された説明書、文献を用いてまとめた。食事サービス、配食サービスの状況や配食時の利用者とのやり取り等については、ヒアリング時に作成した記録、および録音したデータの逐語録を用いて該当部分を抽出し検討した。倫理的配慮として、協力を依頼した職員に対して、本研究の目的や意義、匿名化の方法、データの保管・管理、インフォームドコンセントに関する説明を文書と口頭で説明した。答えたくない質問には答えなくてよいこと、途中で中止できることなどを説明し、同意を得て実施した。また、京都ノートルダム女子大学研究倫理審査委員会の承認（日本での調査：承認番号 16-013、承認日 2016 年 7 月 20 日、海外での調査：承認番号 17-004、承認日 2017 年 5 月 23 日）を受けた。

４．研究成果

(1)研究 1「食生活状況及び食物活動についての認知内容を明らかにする研究」から得られた成果

本研究は、『京都ノートルダム女子大学研究紀要第 49 号』[6)]において「80 歳以上独居女性高齢者の食品摂取状況とその課題－簡易型自記式食事歴訪質問票によるケーススタディー」として報告し、第 59 回日本老年社会科学会(2017 年 5 月)において「86 歳独居女性は自身の食行動をどのように認識しているのか－7 年前に夫と死別した女性の場合－」[7)]を報告した。

まず食生活状況では、地域において一人で暮らす 80 歳以上の女性高齢者 13 名の協力者の日常生活状況、活動状況および食品摂取について検討し、以下の結果と課題を明らかにした。
①BMI 値から低栄養傾向の者、握力の値や最大下腿周径値から筋力低下が疑われる者が存在した
②推定エネルギー必要量よりも 800～900kcal 下回る摂取エネルギー量の低い者が存在した。
③BMI 値、握力値、下腿周径値の低い者は、エネルギー摂取量も低い傾向がみられた。
④エネルギー摂取が適切でも、たんぱく質から摂取するエネルギー比率が低く、ビタミン類、ミネラル類の摂取が少なく、バランスの悪いと判定された者が存在した。
⑤実際の摂取エネルギーが推定エネルギー必要量を上回っていても BMI が 18.5 未満の者が存在した。

今回の協力者は、自分で食事の用意ができ、ボランティア活動、趣味活動にも積極的に参加し、自ら調査協力を申し出た者たちであった。**いわゆる元気で自立した高齢者であり、積極的に社会活動も行っている者たちである。このような高齢者においても栄養状態については適切ではない者、サルコペニアや低栄養傾向が疑われるものの存在を明らかにすることができた。**今回の協力者の中には **1 日の歩数が多く、推定エネルギー必要量に対して、摂取エネルギー量が 1000kcal 以上も少なく、BMI 値が 18.5 kg/㎡未満で「低栄養傾向」と判定される者**が存在した。**BMI 値が適正でかつ摂取エネルギー量が適正でもビタミンや無機質の摂取が少なく栄養素摂取のバランスが悪い者も存在した。**

この研究では、少数でしかも元気で活動する高齢者を対象としたにもかかわらず、「低栄養傾向」の者の存在を明らかにした。**地域で自立している人々の中には、本人も周囲の人々も気づいていない低栄養傾向の者が存在することを裏付けたと**言える。なぜそのような状態になるのかについて栄養面の調査のみならず、足りていないことを高齢者個人が自覚してもらう働きかけや、なぜそのような摂取になってしまうのかを把握しながら栄養指導や健康指導行う必要性が明らかとなった。それには高齢者の思いや考えを把握することが必要である。なお、本研究の結果は、調査後すぐに個々に届け、アドバイスを行ったことを申し添える。

次に食物活動に対する認知内容については、自身の食行動やその変化をどのように認識しているかを分類した結果、『栄養バランスを保つことへの正論・困難感・諦め・工夫の混在』『調理への意欲・困難感と過去の調理行動への自負』『食品購入の楽しみと困難感』『外食の正当化』『配膳のこだわり』『家族への貢献』『幼少期の回顧と解釈』『食習慣形成の理由』の 8 つの大カテゴリーにまとめられた。対象者は、幼少時、子育て時、70 歳代、夫がいたとき、若いときを引き合いに出し、現在の食物活動上の工夫内容、調理への意欲や栄養摂取や調理はどうあるべきかの正論を語っていた。人を招いて食事をふるまう時には自身の行動や能力について「まだ、いける、いけると思った」、外食への態度は「さっと行ける」など、自身の能力を肯定的に評価していた。しかし、「一人の食事は面倒」「手間のかかる煮物は自分ではもうできない」「今は料理をしなくなった」「おなかもすかない」「**食事や栄養が大事と身に染みていてももういいわって思う**」など、食物活動に対する意欲低下や諦め、困難感を認知していることを明らかにした。

高齢者は、栄養摂取、調理や買い物に対して一定の正論を持ち、自身の食物活動の変化にも気

付き、工夫をしているという自分を認知しており、諦めや億劫になるのだという心の変化状態も自覚していることが明らかとなった。高齢者が以前の食物活動を継続できない「諦め」がある場合、早い段階で本人の考え方やその変化の状態を理解し、その上で助言などの心理的支援が必要であろう。食物活動への認知は、過去のイベントや関係した人々の影響を受けていると推測され、これらの内容を把握できればもっと本人の考え方に寄り添って支援できると考えられた。

(2)研究 2「内外の食事（配食）サービスを行う施設の食と心理支援の状況と課題を把握する研究」から得られた成果

本研究は、京都ノートルダム女子大学現代人間学部『福祉生活デザイン研究創刊号』[8]において「健康寿命延伸に向けた食支援と配食サービスの課題－海外及び国内の施設視察をもとに－」と『後期高齢者の「低栄養」を予防するための「食と心理的支援」の研究報告集（1）』（一般市民への配布冊子）において成果報告をした。

今回の調査では、**利用者の疾病問題、人種の問題、政府が提供する介護保険利用や経済的問題等、高齢者への配食事業だけでは片づけられない様々な問題**が明らかになった。食事・食材の提供先、配達の労働力（ボランティアの確保）、食材の形態、配食可能数などに関する課題が明らかとなった。配達側の**利用者とのコミュニケーションの問題、関わることが可能な時間との兼ね合いの問題、認知症や抑うつ状態等の利用者が抱える疾病への対応の難しさの問題等**も明らかとなった。

配達者が認知症高齢者へ対応するための講座やボランティアの養成講座が実施されているものの依然としてその人材確保が難しいということであった。それは、**施設管理者からはボランティアに身につけてほしいと望む資質は、利用者の身体的、栄養的支援の必要性を見抜く力（リスク発見のできる能力）、利用者との関係性を上手に構築できる能力の養成が簡単にはいかないということを意味していた。**また、**配食ボランティア養成においては、ボランティア自身が持つ配食ボランティアへのイメージと現実とのギャップ（イメージしていたよりもより難しい状況が実際に発生するため）があるため、いかにそのギャップを小さくするかも養成する上での課題として認識されていた。**

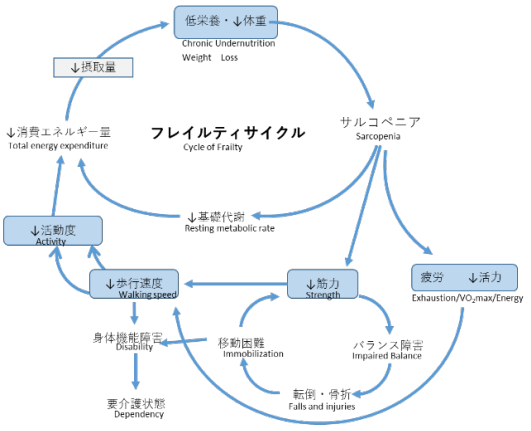
(3)当初予定していなかった成果

当初予定していなかったが、日本家政学会誌に「研究の動向」として「高齢者の低栄養とフレイルティ」[9]を掲載した。ここでは、低栄養者の割合は地域在宅者においては比較的少ないが、介護施設入所者や入院中の高齢者に高頻度で認められること、入院患者においては、低栄養は生命予後の悪化や入院在日数の延長に加えて、大腿骨頸部骨折、院内感染、褥瘡の発症にも関与している[10]ことを**文献研究の成果**をもとに紹介した。

地域在宅の高齢者の低栄養者の割合は、介護施設入所者や入院中の高齢者に比べて少ないが、平成 28 年国民健康・栄養調査結果[11]では、65 歳以上の「低栄養傾向」の者（BMI ≦ 20 kg/m$_2$）の割合は 17.9%と 2 割弱（男性 12.8%、女性 22.0%）を占めている。また、**「低栄養傾向」は、女性高齢者や 85 歳以上高齢者に多く発生していると読み取れることから、早期に発見して対策を講じる必要がある**ことを指摘した.

次に低栄養とフレイルティの関係を示す「フレイルティサイクル」を複数の文献[12)13)14)]を整理して作成した（図 1）. 低栄養はフレイルティの一症状である。様々な理由により摂取量が低下し低栄養を招くと、サルコペニア（sarcopenia；筋量と筋力の進行性かつ全身性の現象に特徴づけられる症候群で、身体機能障害、QOL 低下、死のリスクを伴うもの）[10]発生に影響を及ぼす。サルコペニア状態になると、筋力や筋肉量が低下するため、活力の低下、歩行速度の低下を引き起こし、さらには、活動力が落ち、食欲が減少するというように連鎖的に悪影響が起こるということを示した。この図は、2018 年度に実施した一般市民対象講演会の配布冊子にも掲載し、広く一般市民にも研究成果を理解してもらえるように示した。

「日本一億総活躍プラン」（平成 28 年 6 月 2 日閣議決定）において「配食を利用する高齢者が適切な栄養管理を行えるよう、事業者向けのガイドラインを作成し、2017 年度からそれに即した配食の普及を図る」と決定された. これを受けて、2017 年 3 月 30 日「『地域高齢者等の健康支援を推進する配食事業の栄養管理に関するガイドライン』の普及について」（平成 29 年 3 月 30 日付健発 0330 第 6 号）が厚生労働省健康局長から、都道府県知事、保健所設置市長、特別区長に対して通知されている。これらは地域に住む高齢者への栄養対策のひとつとして評価すべきである。



文献 12）13）14）をもとに作成.□ で囲まれたものはフレイルティの項目.

図1 フレイルティサイクル

しかしながら、高齢者においては食物摂取をしない（できない）様々な理由があり、摂取が低下するとフレイルティサイクルにはまり込み、その結果、連鎖的に悪影響が引き起こされる可能性が高くなる。このことから摂取を妨げている高齢者個人の理由を把握し、介入等によってフレイルティ対策となるような支援が必要であることを主張した。加えて、老年医学や老年看護という臨床の現場では、すでにフレイル対策や研究が数多く行われているものの、家政学の分野では、特に地域高齢者の低栄養やフレイルティに関する研究が少ないことを指摘した。「研究の動向 25 高齢者の低栄養とフレイルティ」を今後の家政学分野における低栄養やフレイルティ研究に生かしてもらえるよう会員へ訴えることができたと考えられる。

本研究は高齢者の低栄養予防に資するために、高齢者への支援は食事支援とともに、個々の高齢者の心理的状況を理解して、食と心理的支援の両輪で支援することの重要性を明らかにする研究である。食生活状況調査からは、低栄養傾向や摂取不足を認識していない高齢者の存在が明らかとなり、この結果は、知らず知らずのうちに、低栄養に陥る危険性を示唆している。また、高齢者の中には、自分の食の細さや、簡単に調理してしまっていることに気づいている人もいたが、食事バランスが適正でないにもかかわらず、自分の食事はバランスよく適正であると思っている人もいた。高齢者がどのように認識しているのか、高齢者が食事を控える理由は何なのかといった心の状態や認知内容を把握できればそれに沿った支援や介入が可能になるであろう。

配食サービスにおいても、配食を利用している人の栄養状態が良いということではない。サービス利用者の中には、食事を配達する人とのコミュニケーションに価値を見出しており、施設側は、それに対応できる資質を持った担当者(ボランティア)の確保や養成の難しさを感じていた。

本研究は低栄養予防には、食物摂取の工夫や調理技術の習得など、栄養摂取に重点を置く食事支援だけでは不十分であり、同時に心理的支援も行う必要があること強く主張するための事例を提供することができた。この結果は支援者側にとっては高齢者個人を深く理解することに繋がり、高齢者においては健康的な食物選択へと関心を向けてもらうことに繋がると考えられる。高齢者の食物活動を改善するためには、高齢者の気持ちを汲み取り、食と心理の両面から低栄養予防施策を計画する必要があり、本研究結果はその計画を推進する裏付けとなり、社会的意義があると考えられる。

また、本研究の先行研究として整理した内容をもとに『研究の動向「高齢者の低栄養とフレイルティ」』として家政学領域の研究者らに示せたことは、低栄養の予防や改善に向けてさらなる研究を推進する上で貢献できたと考えられる。

<引用文献>


1) Rosenbloom. C.A., & Whittington, F.J.：The effects of bereavement on eating behaviors and nutrition intakes in elderly widowed persons. *Journal of Gerontology*: SOCIAL SCIENCES. 1993, Vol.48, No.4, S223-S229.
2) 加藤佐千子. 生活機能の高い高齢者における食物選択動機の様相.京都ノートルダム女子大学研究紀要. 2013, Vol.43,15-28.
3) Lumbers, M., & Raats, M.：Food choice in later life. Shepherd, R. & Raats, M. eds. The psychology of food choice. CABI.2006,289-310.
4) 葭原明弘・清田義和・片岡照二郎・花田信弘・宮崎秀夫. 地域在宅高齢者の食欲と QOL との関連. 口腔衛生学会誌. 2004, Vol.54, No.3, 214-248.
5) 大内尉義・秋山弘子.新老年学［第 3 班］. 東京大学出版.東京. 2010,579-590,1183.
6) 加藤佐千子・長田久雄. 80 歳以上独居女性高齢者の食品摂取状況とその課題－簡易型自記式食事歴訪質問票によるケーススタディー.京都ノートルダム女子大学研究紀要. 2019,Vol.49, 1-13.
7) 加藤佐千子・長田久雄.86 歳独居女性は自身の食行動をどのように認識しているのか－7 年前に夫と死別した女性の場合－. 第 59 回日本老年社会科学会.2017.
8) 加藤佐千子・長田久雄. 健康寿命延伸に向けた食支援と配食サービスの課題－海外及び国内の施設視察をもとに－. 京都ノートルダム女子大学現代人間学部福祉生活デザイン学科福祉生活デザイン研究. 2018,創刊号,17-26.
9) 加藤佐千子. 研究の動向 24 高齢者の低栄養とフレイルティ.日本家政学会誌. 2018,Vol.69,No.6, 462-469.
10) 葛谷雅文. Topic 36.1 高齢者の低栄養：疫学とその結果. 静脈経腸栄養. 2011,26,935-937.
11) 厚生労働省.“平成 28 年国民健康・栄養調査結果の概要.”http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/kekkagaiyou_7.pdf（閲覧日：2017.9.21）.
12) 葛谷雅文. 老年医学における Sarcopenia & Frailty の重要性. 日本老年医学会雑誌. 2009, Vol.46,279-285.
13) 小川純人. 高齢者の健康問題と栄養～ロコモティブシンドローム・サルコペニア・フレイル～. FOODSTYLE21. 2015, Vol.19,38-40.
14) Xue,Q.L.,Bandeen-Roche,K.,Varadhan,R.,Zhou,J.,& Fried,L.P.：Initial manifestations of frailty criteria and the development of frailty phenotype in the Women's Health and Aging Study II. *Journals of Gerontology*. Series A. Biological Sciences and Medical Science.2008,63A,984-990.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>加藤　佐千子 | ４．巻<br>69 |
| ２．論文標題<br>シリーズ研究の動向25　高齢者の低栄養とフレイルティ | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>日本家政学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>462-469 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>https://doi.org/10.11428/jhej.69.462 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>加藤　佐千子　長田　久雄 | ４．巻<br>49 |
| ２．論文標題<br>80歳以上独居女性高齢者の食品摂取状況とその課題－簡易型自記式食事歴法質問票によるケーススタディ－ | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>京都ノートルダム女子大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>1-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>加藤　佐千子、長田　久雄 | ４．巻<br>創刊号 |
| ２．論文標題<br>健康寿命延伸に向けた食支援と配食サービスの課題―海外及び国内の施設視察をもとに― | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>福祉生活デザイン研究 | ６．最初と最後の頁<br>15-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤　佐千子、長田　久雄 |
| ２．発表標題<br>86歳独居女性は自身の食行動をどのように認識しているのか －7年前に夫と死別した女性の場合－ |
| ３．学会等名<br>第59回大会日本老年社会科学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤　佐千子、長田　久雄 |
| ２．発表標題<br>健康寿命延伸に向けた食支援と配食サービスの課題 －食事サービスを行う施設視察をもとに－ |
| ３．学会等名<br>第70回日本家政学会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤　佐千子，長田　久雄 |
| ２．発表標題<br>80歳以上独居女性の食習慣 -簡易型自記式食事歴法質問票によるケーススタディ- |
| ３．学会等名<br>第69回日本家政学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>加藤　佐千子，長田　久雄 |
| ２．発表標題<br>女性独居高齢者における食物活動とその変化に対する認識 |
| ３．学会等名<br>第62回大会日本老年社会科学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 長田　久雄<br>(OSADA Hisao)<br>(60150877) | 桜美林大学・大学院　老年学研究科・教授<br>(32605) | |